

# 玉蟲左太夫論

高橋茂美  
中田正心

## 〈目次〉

はじめに

- 一 「実行者」としての玉蟲
- 二 内面化された〈有志者〉 〓 「実行者」
- 三 〈有志者〉 〓 「実行者」という武士の形成  
おわりに

## はじめに

万延元（一八六〇）年に新見正興を正使として遣米使節七十七名が派遣されてから昨年は百五十年目の節目であった。安政五（一八五八）年にアメリカの全権ハリスと下田奉行との間で締結された日米修好通商条約の批准書を交換するため、使節たち一行はアメリカの軍艦ポーハタン号に乗り込み、日本の軍艦咸臨丸を先導として遙か世界一周の旅に出たのであった。この世界一周の旅は批准書の交換という任務の遂行のみならず、わが国の多方面の分野に亘って数々の近代文明を齎した。このとき、ポーハタン号と咸臨丸に乗った七十七名の遣米使節のうち多くの者が旅日記を書き残したが、現在読むことができるのは四十ほどであるという。<sup>①</sup>特に、日本の軍艦咸臨丸に乗船した勝麟太郎と福沢諭吉が、渡米の経験をこの後十年を待たずして行われた明治維新と近代日本における啓蒙思想の普及において存分に生かしたことは周知の通りである。

咸臨丸に乗った勝麟太郎と福沢諭吉が近代日本を牽引した言わば英雄であるとすれば、彼らの栄光とは違つた角度から輝きを放つ、日本の近代化を成し遂げようとした英雄もまた多く存在する。その一人がポーハタン号に乗った遣米使節の随臣の一人で帰国後『航米日録』を著した、玉蟲たまむし左太夫さだゆうである。

玉蟲は多くの場合、戊辰戦争の際に奥羽越列藩同盟に尽力した仙台藩士の一人として知られている。会津藩主松平容保の意を汲んで会津討伐の命を翻し、東北の夜明けを目指して会津藩とともに戦い、「義」心を貫いた武士である。しかし、戊辰戦争に敗れたことよって囚われの身となり、切腹を余儀なくされた。こうした歴史的な事実が、かえって玉蟲の再評価につながっていることは見逃せない。昭和三十五年六月に発行された仙台郷土研究会編集による「仙台郷土研究」では「玉虫左太夫特輯号」を組んで玉蟲の『航米日録』を分析した論考を載せ、また玉

蟲の略年譜を作成している。これは、玉蟲の再評価の始まりを高らかに告げるものである。この動きを受けて、昭和四十九年十二月には沼田次郎氏による校注が付された『航米日録』が岩波書店の日本思想大系のなかに収録されている。

このような玉蟲研究の動向は無論、玉蟲の歴史的位付けを理論的に行おうとするものである。例えば、池田哲郎氏は〈その知識欲と受け入れ体制は新しいものを撰取する準備として申分がなかった〉とし玉蟲の外国への興味関心の強さを指摘している。また、石川謙吉氏は〈先生は毅然として世界の大勢を説き、勤皇開国の所信を明らかにしたにも拘わらず、藩論動搖の犠牲となつた玉蟲の先見性と悲劇性を読み取っている。池田哲郎氏と石川謙吉氏の見解は、玉蟲が明治維新を待つまでもなく新しい時代精神を身につけていたことを指摘しているという点において一致している。ここから、玉蟲の思想研究の始まりは、玉蟲の人生から汲み取った先見性と悲劇性といった枠組みのなかで捉えられてきたことが分かる。

そこで本稿では、こうした先見性と悲劇性をその思想のなかに内包する玉蟲の人生を辿りつつ、『航米日録』の執筆の周辺を考察する。このことは、今後さらに多角的に玉蟲を研究するための第一段階であると考えるからである。

## 一 「実行者」としての玉蟲

先ほど述べたように、玉蟲は新見正興の随臣として遣米使節の一行に加わり、帰国後艦内で書き綴った日記をもとに万延元（一八六〇）年、『航米日録』一卷から八巻を上梓して、仙台藩主に奉呈した。<sup>1</sup>この旅行記は、万延元（一八六〇）年一月十八日に品川沖からアメリカの軍艦ポーハタン号に乗り込んだところから始まっている。まずは簡

略に遣米使節の一行の足跡を辿ってみる。同年一月二十二日横浜を出帆、以後二月十四日にハワイに到着、三月九日にサンフランシスコに到着、さらに閏三月六日にパナマを経て閏三月二十五日にワシントンに到着する。条約書に調印したのは閏三月二十八日にアメリカ大統領と接見した後の四月三日であった。玉蟲を含めた遣米使節の一行はその後ワシントンに十九日まで滞在し、各地に赴き見聞を広げた。

同年五月十二日には軍艦ナイアガラ号にて大西洋を渡り、六月二十一日にアフリカのルアンダ港に入港、同月三十日にインド洋を横断した。さらに八月、ジャワ島等を経由して九月十日、香港に到着した。同月十八日、香港を出発し、同月二十八日横浜に帰港した。このように、遣米使節の旅は一月十八日に品川沖を出航してから九月二十八日に横浜に帰港するまで、閏三月を挟んでおよそ十カ月間に及ぶ世界一周旅行であった。<sup>5)</sup>

玉蟲がこの間、一日も欠かさずつけていた日記が『航米日録』となった。その記述は、日付、天候、寒暖計の目盛り、船の現在の位置に始まり、船の揺れ具合、波の様子まで非常に細かい。また、比較的長く滞在した場所については、例えばワシントンの場合、〈形勢〉〈風俗〉〈時候〉〈草木〉〈生物〉〈貨幣〉〈物価〉〈旅館〉といった項目を立て、その時々において文章が長かったり短かったりなどの違いはあるものの、それぞれについて観察眼を働かせて記述している。

旅館ハ着岸場ヨリ一里許西南ニ当リ、巨大ノ家ニテ南面ナリ。前長サ半町余、酒店・書肆しよし其外諸品ノ売買所此処ニ備(そなわ)ル。横一町許皆旅客ノ房室ナリ。中央ニ出入戸アリ、階級ヲ歴(へ)テ上下ス。後口屋角ヨリ六七間旅客ノ房室ニテ、其中央ニ出入戸アリ。階級ヲ歴スニ階ヨリ直道ナリ。此ハ地ノ高低ヲ平面ニナシ家ヲ作りシユヘ、前ハ下層ト直道ニシテ後ハ二層ト直道ナリ。此処ヨリ少シク隔テ前六七間横十二三間ノ家アリ、傍ニ廊下アリテ諸房ニ通ズ。其家中中広フシテ一ノ限隔ナク、正面ニ縦二間横一間許、高サ四五尺許ノ木壇アリテ、其上ニ長サ一間許ノ天鷲絨ニテ飾リシ椅子ヲ設ケ、壁間ニ楽器ノ図ヲ掛ケ、其前面ニ当リ、出入戸ノ上

二前六七問横一間半許ノ大閣板アリ。

これは、閏三月二十五日から四月十九日まで滞在したワシントンの〈旅館〉についての記述である。港から約三・九キロのところに向きの〈巨大〉な〈旅館〉がある。この〈旅館〉の〈長サ〉や〈旅客ノ房室〉、〈酒店・書肆〉（しよし）其外諸品ノ売買所此処ニ備（そなわ）つてゐること、さらに〈少シク隔テ前六七問横十二三問ノ家〉の様子などを詳細に描いている。

こうした異国への玉蟲の視線が、玉蟲自身による鋭い観察眼を示すことはすでに指摘されている。例えば、沼田次郎氏は〈航米日録に見える特性〉として〈観察力とともに、その観察の結果を詳細に記録する根気と筆力、しかもそれを困難な旅行の間に短時間にまとめて行く筆忠実さ〉<sup>6</sup>を指摘している。また、瀧井一博氏は玉蟲の視線を〈科学的観察の心眼〉<sup>7</sup>と評価している。さらに、増澤智史氏は先に玉蟲が著した『入北記』とともに〈自己の主観を交えながらも、詳細にしかも徹底的に記録〉<sup>8</sup>していると述べている。瀧井氏と増澤氏との見解が玉蟲の記述のスタンス、すなわち客観的か主観的かといった捉えかたにおいて異なっているが、三者とも『航米日録』における記述が詳細であるということでは一致している。

このような玉蟲の異国への視線は、すでに記したように玉蟲の細かい観察力によるものである。『航米日録』における詳細な記述は異国を見る者・叙述する者としての玉蟲の存在を際立たせていると言える。しかし、そのみならず、玉蟲の記述は異国の見たままありのままであることも看過できない。それでは、こうした「見たままありのまま」の記述に向かう玉蟲の姿勢は、一体何に基づいているのであろうか。またそれは、『航米日録』における玉蟲の客観性を保証するものであろうか。次に挙げるのは『航米日録』の巻一の冒頭である。

万延元年庚申春正月十有八日、正使外国御奉行豊前守新見使君・副使外国御奉行淡路守村垣使君・御目付豊後守小栗使君、其外属官・従臣、総計七十七人、各軽装ニテ、米州華盛頓へ条約ヲ結ント 廟命ヲ蒙リ、彼ヨリ

艤シタルホーハタンへ乗り渡ラレケル。是 本邦剖判ほうぱん以来ノ快事、有志者誰レカ陪扈ばいこヲ欲セザランヤ。唯人員限リアル如何セン。予幸ニシテ新見使君ニ陪スルヲ得ル。元ヨリ書生ニシテ俗務ニ暗シ。賤事ヲ務ムルハ当然ナリ。然レドモ船中ノ紛擾閑ヲ得ル能ワズ。且万里外ノ地、語音侏離しゅりげきせつ駄舌更ニ通ゼズ。何以テ其政事・物情深ク探ルヲ得ンヤ。遺憾ト云フベシ。是以テ予独見ニ從へ漫然記ス。

右は、玉蟲の「見たままありのまま」の記述の動機とも言うべき文章である。ここでは、遣米使節の一行に加わることになった経緯や、『航米日録』のもととなる日記を書いたときのスタンスなどが明確に記されている。そこで、玉蟲が自らを〈有志者〉を任じていることに注目したい。<sup>(9)</sup>このことについて、松沢弘陽氏は〈筆者玉蟲の「有志者」としての強烈な自己意識〉は『航米日録』を他の見聞記から引き離す〈個性〉であると述べている。<sup>(10)</sup>また、増澤智史氏も〈有志者という語は玉蟲の思想研究においてキーワードとなる〉と述べて、この言葉の重要性を指摘している。<sup>(11)</sup>このように、〈有志者〉という言葉から玉蟲における積極的な異国見聞への意志を読み取ることが多い。

しかし、再び注目したいのは、日米修好通商条約の批准書を交換するために米国へ向かうことを〈本邦剖判ほうぱん以来ノ快事〉と解し、また書き記したうえで〈有志者〉という認識である。すでに幕府は安政元（一八五四）年にアメリカ、イギリス、ロシアとの間に和親条約を結んでいるため、日米修好通商条約の締結自体を〈本邦剖判ほうぱん以来ノ快事〉と述べているのではないことは明らかである。とするならば、何をもって〈本邦剖判ほうぱん以来ノ快事〉とされるのか。それは、〈彼ヨリ艤シタルホーハタンへ乗り渡ラレケル〉という箇所が示しているように、見知らぬ国、米国へ行くという行為にほかならない。特に、安政年間における玉蟲のアイデンティティを保証し、それを現実の体制のなかで実現する唯一の方法として、米国に行くことは玉蟲にとって欠くべからざる行為であった。玉蟲の随臣としての立場は低い身分でありそれ相応の待遇であったが、それゆえに米国へ行かねばならぬという、幕藩体制における自己の立場を超えた「実行者」としての意識が存在したはずである。無論、そこには次章で述べるように、

一人の武士すなわち仙台藩士として「実行」することが前提となっている。つまり、巻の一における〈有志者〉という言葉が意味しているのは、現実の幕藩体制のなかに仙台藩士としてのアイデンティティを確認し、その実現を意図する「実行者」としての意識だったのである。そして、玉蟲の「実行者」としての意識ゆえに、「見たままありのまま」の記述につながっていく。それは、藩士としてのアイデンティティを実現する場、すなわち艦内やアメリカという未知の場を実体験を通して書き記すことになるからである。<sup>12)</sup>

## 二 内面化された〈有志者〉 Ⅱ 「実行者」

『航米日録』における、ほかの見聞記には見られない玉蟲の特徴が「実行者」としての自覚にあるとすれば、それはどのようにして生まれたのであろうか。このことを確認するために、ここで再度、玉蟲の人生について簡単に触れておきたい。

玉蟲は文政六（一八二三）年仙台藩士の玉蟲平蔵仲茂の第九子第七男として生を受けた。<sup>13)</sup> 諱は誼<sup>よし</sup>茂である。玉蟲家は代々疋田流槍術を教授する家柄のため、左太夫も武術、特に槍術をよく行っていた。しかし、二歳のとき父仲茂が急死し、やむなく兄勇蔵に育てられながら藩校養賢堂に通った。数え年十三歳のとき、学才を認められて仙台藩士荒井東吾の養子となり、その長女虎婦<sup>こぶ</sup>と結婚、天保十三年、二十歳のとき娘佐世が誕生した。しかし、弘化三（一八四六）年三月二十二日、虎婦<sup>こぶ</sup>の早逝を受けて荒井家を出奔し、同年十一月に江戸へ上った。このとき玉蟲は数え年で二十四歳であった。

江戸へ上った当初は按摩などの仕事をしつつ苦しい生計を立てていたが、当時の大学頭<sup>だいがうのあたま</sup>林復斎の下僕となる機会を得たのみならず直接林復斎からその学才を認められる好機を得て、後に塾頭となった。安政のはじめ、玉蟲三十

二歳ごろ、林家を辞め江戸の仙台藩邸順造館にて若い仙台藩士たちの指導を進んで行った。安政四（一八五七）年、三十四歳のとき、箱館奉行堀織部正利熙に同行して蝦夷地を視察し、その記録をまとめた『入北記』を著した。その三年後、万延元（一八六〇）年、玉蟲が三十八歳のとき、遣米使節の新見正興の随臣となって一月十八日に出発し、九月二十八日に帰国した。このときの見聞を『航米日録』に著して仙台藩主伊達慶邦に献呈したことで、玉蟲は再び仙台藩士として認められ、文久元（一八六一）年、大番組に昇進するなどさまざまな恩賞を受けた。

同年から玉蟲は諸藩の状況の調査を命じられ、文久元（一八六一）年から文久三（一八六三）年までの調査結果を『遊武記』と『官武通紀』（全十三巻）にまとめた。文久三（一八六三）年、四十一歳のときには諸藩の調査結果をまとめながら「食塩製造論」を発表した。慶応元（一八六五）年、四十三歳の玉蟲は宮城県の気仙沼に製塩所を設立すべく尽力した。慶応年間における諸藩の動向は『慶応記事』（全二巻）と『西遊漫録』にまとめられている。慶応二（一八六六）年五月十八日、四十四歳で仙台藩校養賢堂指南頭取に昇進した。明治元（一八六八）年四月二十一日、奥羽越列藩同盟に尽力したが九月十日、藩論が急変したことにより玉蟲は十月十四日に志津川で捕縛され仙台に投獄された。明治二（一八六九）年四月九日、切腹を命じられ自刃に至り、四十七歳の生涯を終えた。

このように、玉蟲の生涯を改めて辿ると、仙台藩士として生を受け、ある時期に脱藩して江戸へ向かい、渡米後は再び仙台藩士として認められ、戊辰戦争の際には藩と東北一帯の繁栄のために奔走したという大きな出来事が見取れる。ここで重要なのは、玉蟲が一度仙台藩を脱藩してから渡米という大きな出来事を経て再び藩に戻ったという事実である。この事実は玉蟲の人生において非常に大きな決断であり、なおかつ玉蟲の転換期を意味しているにも拘らず、十分な検討がなされていない。次に、玉蟲の仙台藩からの脱藩と帰藩の意味を考えていく。

まず、玉蟲が仙台を離れた契機は、弘化三（一八四六）年の三月に妻の虎婦が他界したことに求められる。このときの玉蟲の動機として、山本晃氏が「荒井家の家庭の事情や、自らの将来を考え、また時事に感ずるところあり」



と述べているのを始めとして、主に〈時事に感ずるところあ〉つて玉蟲が江戸へ向かったとするのが定説である。<sup>(14)</sup>このとき玉蟲は二十四歳であるからすでに養賢堂での学びは終えているのであるが、江戸へ行く希望があったのであれば、優秀な玉蟲は藩の許可を得て〈遊学〉という形で正式に江戸へ学問修行に出ることもできたはずである。<sup>(15)</sup>にも拘らず、玉蟲が恩ある荒井家と藩を半ば捨てるような形で江戸へ向かったのは一体何故なのであるか。

幕末の日本における対外情勢は、非常に緊迫した状況にあった。玉蟲が生まれる前の対外情勢を概観すると、周知のように、ロシアは安永七（一七七八）年、寛政四（一七九二）年、文化元（一八〇四）年などに日本に来航し、通商交渉を迫っている。無論、ロシアのみならず、寛政八（一七九六）年にはイギリス人が日本の沿岸を測量することを目的に室蘭へ来航したり、文化五（一八〇八）年にはフエートン号事件が勃発したり、文化十四（一八一七）年には浦賀にイギリス船が来航したりしている。このように、徳川幕藩体制の危機は、国内の動揺とともに国外からも国交を迫られる形で揺さぶりをかけられていたところに見られる。こうした動向を受けて、幕府は文政八（一八二五）年に異国船打払令を發布している。このとき玉蟲は数え年で三歳、奇しくも父親と死別して兄の勇蔵に育てられていたところであった。幕末の対外情勢と幕府の対応について、『仙臺戊辰史』に次のような記述が見られる。

幕末ニ於ケル海外ノ形勢ヲ見ルニ、米國ガ英ノ羈絆ヲ脱シテ独立スルト共ニ仏國ニモ大革命ヲ生ジテ反動ハ反動ヲ産ミ、戦乱相次ギシ結果、漸ヤク平和ニ復スルヤ、航海術ノ進歩ト共ニ貿易モ亦四方ニ開展シ、英仏米露等シク東洋ニ其ノ力ヲ伸バサントシテ我邦ニ來ルノ頻々タリ、而シテ幕府ハ嚴ニ鎖攘主義ヲ探リ寛永ノ夷船打払命令ヲ先例トシ漂流民還送ノ便船サヘモ寄泊ヲ許サズ、文政中再ビ打払ヒノ令ヲ発セシガ嘉永六年米艦ノ浦賀ニ來タルヤ其ノ要求ノ嚴ニシテ勢ヒノ堂々タルニ怕レ、水戸前中納言ヲ蟄居中ヨリ起シテ意見ヲ諮問シ終ニ、京都へ上奏シテ叡慮ヲ伺ヘリ、是実に徳川氏失政ノ序幕ナリキ、蓋シ徳川氏ハ 陛下ノ大権ニヨリテ委任セラ

レタル政府ナリ、外交ノ案件ニ付キ先ヅ其ノ処分方法ヲ決定シ理由ヲ具シテ御裁可ヲ奏請スルヲ至当トス、是レ政府ノ権能ナレバナリ<sup>(16)</sup>

ここで重要なのは、イギリス、フランス、アメリカ、ロシアが（等シク東洋ニ其ノ力ヲ伸バサン）としていたことである。さらに、嘉永六（一八五三）年にペリー提督が浦賀に来航したときの徳川幕府の対応が（水戸前中納言ヲ蟄居中ヨリ起シテ意見ヲ諮問シ終ニ、京都へ上奏シテ勸慮ヲ伺）ったことへの、（政府ノ権能）を果たさない（失政）を厳しく批判している。こうした徳川幕府への批判が仙台藩における戊辰史を顧みる際に記述されていることは注意すべきである。

蓋シ英国ハ米大陸ニ失ヒタル所ヲ東洋ニ求メントシ、仏国ハ那翁一世ノ敗後其ノ国威ノ減ジタルヲ憂ヒ版図ヲ極東ニ求メントシテ競ヒ、先ヅ手ヲ支那大陸ニ下シタルモノナリ、英仏已ニ斯ノ如シ、露国ハ南下ニ障碍多キ為メ其ノ野心ヲ専ラ東ニ向ケ、新タニ独立セル米國ハ太平洋航路中最好ノ寄泊地タル日本ト修交條約ヲ訂スニアラザレバ其ノ不便不利甚ダシキヲ感ジ日本ヲシテ開國セシメズバ已マジトノ覚悟ヲナシタリ、形勢斯ノ如クナルヲ以テ多少国外ノ事情ヲ知ルモノハ世界ノ通誼ニヨリテ修交ヲ求メ來ル諸強國ニ対シ理由ナク撃払フガ如キ不法ハ國ヲ擧ゲテ焦土トナス所以ナルヲ悟リタリ。<sup>(17)</sup>

国外からのこうした領土拡張、国威の発揚、利権の獲得などといった（英仏米露）の（野心）に基づくアプローチが幕藩体制に緊張をもたらした。このような国内外の情勢は無論、玉蟲を取り巻く情勢でもあった。特に、安政五（一八五八）年に日米修好通商条約を調印した際、玉蟲が（世界ノ通誼ニヨリテ修交ヲ求メ來ル諸強國ニ対シ理由ナク撃払フガ如キ不法ハ國ヲ擧ゲテ焦土トナス所以ナルヲ悟）っていたことは確かである。このような玉蟲の異國への対応について、山本晃氏は次のように述べている。

林塾にある間、励精怠らず学大いに進んだのは勿論であるが、更に広く四方の名士を訪ねてこれと交わり、見

聞を広くするところあり、殊にもペリー来航の際には林大学頭はその応接役、談判員となり、条約の批准を得るために京に使いするなど種々外交事務を執掌していたので、左太夫もまた世界の大勢につき啓発せらるゝところが多く、海外に関心を持つに至った。<sup>18)</sup>

山本晃氏は、玉蟲が林復斎のもとで学んだ意義を玉蟲自身の刻苦精励とともに（四方の名士を訪ねてこれと交わり、見聞を広く）したという行動力に見出している。また、ペリー提督が来航したころ、玉蟲は復斎のもとで塾頭をしていたこともあり、その（応接役、談判員）としての復斎の言動を耳にしていたため、（世界の大勢につき啓発せらるゝところが多く、海外に関心を持つに至った）と述べている。確かに、山本晃氏が述べているように、玉蟲は復斎から（応接役、談判員）にしか知りえない多くの情報を入手していたと考えられる。しかし、それは、玉蟲が初めて（海外に関心を持つに至った）ことを示唆するものではない。玉蟲が仙台藩の出身であることが示しているように、慶長十八（一六一三）年九月、第十七代藩主伊達政宗が支倉常長を使節としてローマに派遣しており、異国を身近なものとして捉えていたと考えられる。つまり、異国についての知識は幼いころから学んだ養賢堂で、あるいは周囲の人々からの耳学問によって、すでに身に付けていたのである。異国についてのさまざま知識と政宗に対する崇敬が後の知識人に、自ら異国へ「行く者」としての自己を内面化していたと考えられる。このように、玉蟲の（有志者）<sup>19)</sup> 、「実行者」としての意識には、長い歴史を通してすでに内面化され、相対化された異国との関係があるのである。

### 三 「有志者」 Ⅱ 「実行者」という武士の形成

すでに内面化された意識として、異国へ「行く者」としての自己が存在していたとすれば、それはどのようなし

て自覚させられ、玉蟲はその実行に向かわせたのであろうか。仙台藩を半ば脱藩するように飛び出した直接の理由は、異国との交渉を積極的に唱えた学者たちへの言論弾圧のなかにある。

周知のように、天保八（一八三七）年、浦賀に來航したアメリカの艦船モリソン号が幕府の砲撃により目的を果たせずに去った事件は、当時の知識人が幕府の対応に多大な疑問を持つに至らしめた。尚歯会の中心メンバー、すなわち高野長英、渡辺畢山らが投獄され、自刃に追い詰められた、いわゆる蛮社の獄である。モリソン号事件が発生したとき、玉蟲は数え年で十四歳であり、藩校養賢堂に通っていた。ちょうど荒井東吾に見出され、養子に迎えられたところである。無論、異国については養賢堂などで学んでいたため知識としては蓄積されていたが、その知識が現実のものとして姿を現したわけで、その外国船への関心は並々ならぬものがあつたと考えられる。しかし、玉蟲がより強烈に関心を示したのは、むしろ蛮社の獄で言論弾圧をされた人物のほうにあつたはずである。というのも、弾圧された尚歯会のメンバーのなかに高野長英という仙台藩の水沢出身の人物がいたからである。

蘭学者の高野長英は、幕府がモリソン号を追い払ったことを受けて天保九（一八三八）年、幕府を批判する文章、『戊戌夢物語』を書き始めた。次に挙げるのは、その一節である。

イギリスは日本へ対して敵国にはこれ無く、謂はゞ付合もこれ無き他人に候処、今般漂流人を憐み仁義を名して態々送り來り候者を何事も取合申さず、直に打払に相成候はば、日本は民を憐まざる不仁の国と存すべく候。

若又万一其不仁不義を憤り候はゞ、日本近海にイギリス属島夥しくこれ有り、始終通行致し候得者、後來、海上の寇（あだ）と相成候て、海運の邪魔に相成候哉も計り難く、左はゞ自然国家の大患にも相成り申すべし。

〈仁義〉をもって日本の〈漂流人〉を助け送り届けたモリソン号を追い払うという行為は〈不仁不義〉であり、〈日本近海にイギリス属島〉が多く存在するため、後になって〈海上の寇（あだ）〉となり〈海運の邪魔〉ひいては〈国家の大患〉にもなるといった内容である。実際、長英が述べているように、モリソン号は漂流した日本人を連れて

来航した。ここでの長英の主張が、あくまでもモリソン号側の〈仁義〉にあることは看過できない。なぜなら、異国の人の「思いやりの心」に惹かれ、それを重視する考えかたは玉蟲の『航米日録』にも見られるからである。つまり、玉蟲は、同じ仙台藩出身の蘭学者が述べたことに同調していたと言える。

しかし、長英は『戊戌夢物語』における主張がもとで天保十（一八三九）年、三十五歳のとき投獄されてしまう。弘化元（一八四四）年、牢屋が火災になったことをきっかけに長英は脱獄し、偽名を使って江戸で医者を生業としていたが、嘉永三（一八五〇）年十月、自刃した。玉蟲は、長英が同じ仙台藩出身ということで、その主張や動向には注目していたと考えられる。長英が火災を機に牢屋から脱出したとき玉蟲は数えて二十歳であった。玉蟲が知識として持っている異国の人の「心」を汲み取り、その重要性を訴えた長英の主張は、異国へ「行く者」として玉蟲の意識に統一と具体的な行為を促したのである。長英の主張に誘われた具体的な行為、それはまず、荒井家を辞し藩をも出奔して、異国との交渉の場、江戸へ行くことであった。ここに、まずは〈有志者〉∥「実行者」としての二十四歳の玉蟲を見出すことができるのである。

もう一つ、〈有志者〉∥「実行者」としての玉蟲の決意を垣間見ることができるのは、安政のはじめ、玉蟲が数えて三十二歳ごろ、塾頭までのぼりつめた林家を辞めたことにある。その理由についても明らかではないが、やはり、長英の死と無関係ではない。長英の死は玉蟲が数えて二十七歳のとき、林家を辞めたのが三十二歳のときであるから、約五年という時間が流れている。これは、玉蟲が塾頭などをして活躍していた時期である。通説では、この約五年を玉蟲の出世を含む輝かしい人生的一幕のように捉えているが、実際の玉蟲は複雑な心情を抱えた約五年であったと考えられる。玉蟲に異国の人の「心」を教え、「実行者」としての具体的な行為を教えた高野長英を蛮社の獄で弾圧し、死に至らしめた鳥居耀蔵が林述斎の息子で、恩師林復斎と兄弟だったことは、玉蟲も知っていたはずである。

玉蟲は幕府のなかに、異国との和親に積極的な恩師の復斎たちがいる一方で、異国の文化や制度が入ってくることで幕藩体制が崩壊することに危機感をつのらせる鳥居耀蔵などがあることに気付き、体制そのもののなかに矛盾があふれていることを察した。そうした幕藩体制における矛盾が高野長英らの命を奪ったように、「実行者」としての玉蟲のアイデンティティの実現の場を崩壊させることも、時間の問題であったのである。このように、復斎との決別は、玉蟲が「実行者」としての自己を保ちつつも、高野長英のように堂々と幕府を批判することができる方を手に入れることにつながっていくこととなる。

## おわりに

以上論じてきたように、玉蟲が遣米使節の随臣として加わることは〈有志者〉Ⅱ「実行者」としてのアイデンティティの実現を意味していたことが明らかとなった。したがって、ポーハタンに乗り込む時点で、玉蟲が他の使節や随臣たちとは異なった目的をもっていたことになる。すなわち、単なる異国への興味、関心のみならず、今も述べたように、〈有志者〉Ⅱ「実行者」としてのアイデンティティの実現を目指していたこと、さらに幕府への批判眼を携えつつ旅に出ることであった。その方法の一つとして、ポーハタン号のなかで、そしてアメリカで見たたり聞いたりしたことを「見たままありのまま」に記すという手法を用いた。異国の制度、文化、風俗すべてについての完全な記述、これこそが見知らぬ異国を知るために玉蟲が自らに課したことであった。言い換えれば、書いたこと全てが玉蟲が見たアメリカの全世界であったのである。

また、玉蟲が遣米使節に随行して見聞したことを書くことは、異国の人の「心」を尊重して対等に諸外国と接することを示唆した高野長英の言説を自ら確認するための旅でもあった。『航米日録』はその成果とも言える。玉蟲

の血縁の一人、玉蟲文一氏は次のように述べている。

この書は一つの旅行記であるが、単なる印象記でもないし、感想録でもない。それは命をかけた一人の人間の深刻な体験の記録であると同時に、非常に鋭い観察眼と高い見識をもった一学究の異国の風物、自然に対する科学的記録なのである。そこには、長い間続いた鎖国の束縛を脱して外国の文明に接しようとした日本人の生々しい体験が簡明率直な語によって述べられていると同時に、その当時のアメリカ合衆国その他の国の政治、経済、学術、風俗、慣習、さらにそれらの国、地方の地勢、気象、生物などについての正確な記述がなされている。<sup>20)</sup>

玉蟲文一氏が指摘するように、『航米日録』は単なる〈印象記〉や〈感想録〉ではない。それは〈命をかけた一人の人間の深刻な体験の記録〉であり、玉蟲が書くことの意味とその特異性を浮き彫りにしていると言える。すでに内面化された「実行者」としての意識を再び駆り立て、新しい時代に向かつて流れていく時間のなかで、実行すなわち書くことによって仙台藩士としての自己のアイデンティティを確立できる場そのものを日本国内に形作っていくことこそが、玉蟲が強く抱いた「志」<sup>21)</sup>だったのである。

### 【注】

- (1) マサオミヨシ『我ら見しままに』（昭和59年3月14日、平凡社）。
  - (2) 池田哲郎「玉虫諠茂の『航米日録』」（『仙台郷土研究』第20巻第2号、昭和35年6月20日、仙台郷土研究会）。
  - (3) 石川謙吉「仙台藩士玉虫左太夫先生の功績を偲ぶ」（『仙台郷土研究』第20巻第2号、昭和35年6月20日、仙台郷土研究会）。
  - (4) 上梓した『航米日録』の巻一から巻八のうち、巻八には〈敢て他人ニ示スニハ非ズ〉と記されている。
- (5) 玉蟲の人生ならびに随員としての行程を辿るにあたっては、『仙台郷土研究』第20巻第2号（昭和35年6月20日、仙台



- 郷土研究会)、日本思想大系66『西洋見聞集』(昭和49年12月24日、岩波書店)を参照した。
- (6) 沼田次郎「玉虫左太夫と航米日録」(日本思想大系66『西洋見聞集』、昭和49年12月24日、岩波書店)。
- (7) 瀧井一博「玉虫左太夫——幕末の異文化探訪者」(「本」、平成21年3月1日、講談社)。
- (8) 増澤智史「玉虫左太夫著『入北記』におけるアイヌ観」(「国際人間フォーラム」第3号、平成19年3月30日、中部大学大学院国際人間学研究科)。
- (9) 『航米日録』の巻一の序文の〈有志者〉という言葉は、玉蟲家所蔵の別本の巻一、東京大学付属図書館本、同大学史料編纂所本などには〈有志ノ徒〉と記されている。
- (10) 松沢弘陽「さまざまな西洋見聞——「夷情探索」から「洋行」へ——」(日本思想大系66『西洋見聞集』、昭和49年12月24日、岩波書店)。
- (11) 注(8)に同じ。
- (12) そのような意味で、小田基氏は、『航米日録』にはポーハタン号の艦内における人間関係が記されていると指摘しているが、それが描かれることは決して偶然ではない(「遣米使節団の二つの日記」、「岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集(人文・社会科学編) 創刊号、平成11年3月26日)。
- (13) 玉蟲文一氏は「玉虫左太夫とその周辺」(日本思想大系66『西洋見聞集』、昭和49年12月24日、岩波書店)のなかで、玉蟲は〈七男〉であると記しているが、『姓氏家系歴史伝説大事典』(平成15年7月22日、勉誠出版)には〈五男〉とある。本稿では、玉蟲文一氏の記述にしたがって七男と記す。
- (14) 山本晃「玉虫家の家柄と左太夫」(「仙台郷土研究」第20巻第2号、昭和35年6月20日、仙台郷土研究会)、玉蟲文一「玉虫左太夫とその周辺」(日本思想大系66『西洋見聞集』、昭和49年12月24日、岩波書店)、『明治維新人名辞典』(昭和56年9月10日、吉川弘文館)などがある。
- (15) 工藤航平氏は藩士の〈遊学〉について、〈多くの藩では、人材育成のために藩費による江戸や他国への遊学を奨励しており、藩学で基礎的能力を身に付けた人物が、三都の私塾や他藩々学で学んだ〉と述べている(「近世藩制・藩校大事典」、平成18年3月10日、吉川弘文館)。無論、こうした制度としての〈遊学〉は仙台藩も認めていた。
- (16) 藤原相之助『仙台戊辰史』(明治44年7月4日、荒井活版製造所)。



- (17) 注(16)に同じ。
- (18) 山本晃「玉虫家の家柄と左太夫」(「仙台郷土研究」第20巻第2号、昭和35年6月20日、仙台郷土研究会)。
- (19) 高野長英『戊戌夢物語』(天保9年)。なお、文中イギリスと記しているのは誤りである。
- (20) 玉蟲文一「玉虫左太夫著『航米日録』について」(「仙台郷土研究」第20巻第2号、昭和35年6月20日、仙台郷土研究会)。
- (21) 玉蟲は仙台藩のみならず日本の将来を導いていく際にも「実行」が重要であると考えていた。『航米日録』の分析については別稿を用意している。

【付記】

本稿における『航米日録』からの引用は、日本思想大系66『西洋見聞集』(昭和49年12月24日、岩波書店)に拠った。旧字体を新字体に改め、適宜ルビを省略した。

(二〇一一年二月十四日)

